妹たちのかがり火

戦死した兄さんを悼む

仁木悦子編

講談社

妹たちのかがり火

定価　五〇〇円

昭和47年7月4日　第1刷発行

編者　仁木悦子

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号112
電話東京(03)944-1111(大代表)
振替口座東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社黒岩大光堂

☆落丁本・乱丁本はおとりかえします

NDC 210　19.4cm

PRINTED IN JAPAN

0095-167211-2253（0）　(学2)

はじめに

新聞の投書欄、短歌欄などに、第二次大戦で死んだ兄をテーマにした女性の文章や作品が目につくようになったのは、ここ二、三年来のことのように思う。目につくといってもそれは極めて控えめな形でであって、私がたまたま同じ立場にあるために注意を惹かれるにすぎないと、片づけられそうな程度であるが——。

この極めて控えめな、しかし明らかに動き出したがっているうずきにも似たエネルギーを、一つに結集することはできないだろうか。わずか四、五百字の投書に託した「語りたい気持ち」に、今すこし大きな場を与えることはできないだろうか——と考えて、そういう意味のことをある新聞の投書欄に出してみた。昭和四十六年八月十六日付朝刊にそれが掲載されて最初に現われた反響は、二十通足らずの手紙だった。数としては決して多いとはいえない。だが、その一通一通にじんでいる、悲しみと怒り、長い年月こころの底にしまっていた記憶を形あるものにしたいという痛切な欲求、そして戦争が二度と起こってもらっては困るという理屈ぬきの素朴な願いは、半分無責任な軽い気持ちでいた私を突き動かした。

私たちは、このグループに「かがり火の会」という名をつけ、ガリ版刷りのパンフレットのような文集を作ろうと計画した。このささやかなグループが、半年余りのちには会員百四十名を越える会に発展し、このような本をつくりだせようとは、誰が予想したろう。

「かがり火の会」には会長も役員もいない。事務は私が引き受け、この本の編集にもあたったが、会も本も私がつくったものではない。責任の所在をはっきりさせる意味で私の名を表紙に明記することになったけれど、この本を生み出したのは、執筆しない人も含めた全会員のあふれる熱意以外のなにものでもないのだ。

この文集の内容については、読者に読んでいただけばよいことで、つけ加えることは何もない。ただ、一こと言うならば、収録文の筆者たちは、ほとんどが平凡な主婦であり、母親であり、社会の一隅で働いている無名の女性である。彼女たちが「戦争はいやだ」と言うのは、イデオロギーではなく、どこまでも彼女たちの実感なのだ。

この平凡な女性たちが少女期の記憶をありのまま書いた文章は、あるいはたどたどしく、一面的であるかもしれない。巨大な第二次大戦を描いたものとしては、群盲が象をなでているようなことかもしれない。しかし、一人一人がなでているのは鼻にすぎず尾にすぎないかもしれないけれど、それはまぎれもない生きた象なのだ。写真や、遠く離れて眺めるのとは違った、ざらざらとなまなましい象そのものの感触であり、それを綜合することによって、巨大な生きた象の姿が、あるいは浮かびあがるのではないだろうか。

昭和四十七年五月

仁木悦子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

妹たちのかがり火／目次

はじめに

最後の言葉……（勝田市）大谷和子　11
兄の死に意義をみつけてやりたい……（東京都）徳永　栄　17
兄のこと、弟のこと……（鹿沼市）大塚宥子　25
「縹（はなだ）の海」抄……（東京都）杉井良枝　36
大空の果てに……（福島市）堀江れい子　（いわき市）馬場かつ子　40
一冊の本……（東京都）仁木悦子　47
兄ちゃんを返してくれ……（鴨川市）関　和子　59
ひとりの召集兵……（東京都）佐藤マツ　69

十四歳の命は帰らず……（横浜市）木村悦子　75
ひとりぼっちの盂蘭盆供養……（山形市）五十嵐フミ　84
若い叔父たちの死……（高松市）安井信子　90
大海原に眠るみたまに……（仙台市）寺島弘子　95
幼き海軍特別年少兵……（佐野市）鈴木勝子　101
戦いの日々……（立川市）神田泰子　109
結婚半年の妻を残して……（川崎市）雨宮初恵　122
硫黄島の石……（千葉市）佐藤ヤエ　128
あのころのこと……（那珂湊市）緑川摂子　135
大黒柱を失って……（大村市）井手瑞枝　139

少女のころ……（盛岡市）天沼一重　144
白い貝……（東京都）新野千栄子　150
弟のお墓参りを終えて……（東京都）関　房江　152
追　憶……（東京都）田辺歌子　159
あの日の兄と母……（東京都）伊藤道子　164
反骨の心……（国立市）杉山百枝　169
沖縄からの便り……（苫小牧市）白石登美香　176
亡き兄への手紙……（東京都）小西正子　181
四人の兄弟を失って……（山形市）五十嵐万佐子　189
鎮魂歌……（千葉市）西原若菜　201

ようかんを食べさせたい……（茅ケ崎市）久家基美 205
兄の青春……（東京都）寺沼汲子 208
閃光と兄の死……（神奈川県）早川みはる 213
兄――その周囲――……（調布市）小川艶子 220
「マンマも食わせられないで……」……（横浜市）吉川美智子 226
兄とその妻……（東京都）村岡崇子 236
帰らざりき……（宇都宮市）大島かづ子 244
絵筆に生きた兄……（東京都）岸田陽子 255
シベリアで死んだ兄を思う……（千葉市）実川節子 265
冬と凍土……（川口市）藤木靖子 269

英霊の島、レイテ島を訪ねて……（横浜市）久保田幸子 280
二つの木の実……（黒磯市）藤田久子 292
編集にあたって 295

装丁／稲垣行一郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

妹たちのかがり火

――戦死した兄さんを悼(いた)む――

最後の言葉

大谷和子
（大正十一年生まれ、勝田市、主婦）

大谷　忍　大正七年、勝田市生まれ。長男で下に妹三人があった。県立水戸中学（現在の水戸第一高校）卒業。水戸郵便局に勤務中現役入営し華北に出征。清水部隊有富部隊所属で昭和十六年三月二十日中国山西省で戦死。陸軍少尉。二十二歳、独身。筆者はすぐ下の妹。兄の戦死当時は十八歳。

その朝は、見渡す限りの畑が雪におおわれ、朝の陽光をきらきらと反射させていた。すがすがしい門出であった。入隊の兄を見送りに集まってきた村人たちに赤飯がふるまわれた。

きびしい軍隊生活にそなえるため、入隊前日まで、母は兄に土を詰めた背のうを背負わせ、毎日内庭を行ったり来たりさせていた。それをながめていた病床の母の心に去来するものはいったいなんであったろうか。

輝くばかりの雪景色の中に日の丸の小旗をかかげた行列は美しかった。りりしく緊張した二十歳の青年兄のおもかげは、感動的な余韻を残して勝田駅のホームに消えた。

同じ場所に白木の箱を抱えて私が降り立ったのは、二年と三ヵ月後であった。明日遺骨が帰るという日、私は床屋へ行き顔をそってもらった。いくらがんばってみても、涙が溢れてきて耳に

入ってしまう。床屋さんは事情を知っていたのであろうか、何も問わず涙をふいてくれた。

私の家では、兄が入隊中に父が死んだ。妹二人と母と女学校三年の私と四人になった生活には、それでもまだ兄という心の支えが残っていた。葬式のために帰郷した兄の軍服姿を、母は頼もしげに前を向かせたり後ろを向かせたりしてながめていた。

兄は、父の仕事の関係で、六年間に五つの学校を変わった。どこへ行ってもすぐ一番になってしまったという話で、本人は買いかぶりをされたと笑っていたが、母にとっては頼もしい存在に違いなかった。

父の死後、病床にあった母が起き出した。しっかりせねばと思ったのであろう。近くの父の墓に毎日お参りに行けるほどになった。

昭和十六年三月二十日、兄は戦死した。公電がはいったのは三月二十五日、夕食をとっているときであった。どこからの電報か確かめた母は、電報配達夫に私を本宅まで連れていってくれるように頼んでくれた。暗い夜道を配達夫に連れられて、やや離れた本宅まで私は兄の戦死を告げに行った。「電報」という声をきいたときからの体のふるえが止まらず、足がふわふわとして空を歩いているような感じであった。

本宅の人を連れて帰ってくると、食べかけの茶わんの上に一片の紙切れが落ちていた。

「リクグンセウイ　オオタニシノブ　三ツキ二〇ヒ　サンセイセウ　ヨクゼウケンニテメイヨノセンシス　トウ三七テフ」

東部三十七部隊長よりの公報であった。

翌日、新聞社の人や役場の人たちが来たが、母はだれにも会わなかった。病状が急激に悪化したので面会謝絶となったのだ。弔問客は親戚の人が相手をした。

戦死の公報はすぐ新聞に載った。どうやって手に入れたのか、最後の別れに写した兄妹四人いっしょの写真が載っていた。そして私を驚かしたのは「軍国の母は語る」「健気な妹は語る」という文字であった。「名誉なことです。兄に負けず銃後の守りに励みます」という記事である。

まぶたがはれ上がるほど涙にぬれて、何をどうしていいのかわからない、肉体の一部をちぎり取られるような苦痛に耐えるのがやっとだったそのときの私が、こんな立派な言葉が言えるはずがあろうか。第一、母も私も部屋にこもりきりで他人には会っていないのだ。人にも会えないほど意気地のない私たちを、かばうために親切にも美談を作り上げてくれたとでもいうのだろうか。以来どんな新聞も私は割り引きして読むことにしたのである。

母はそれから四年四ヵ月後、アメリカ軍の艦砲射撃のショックで死ぬまで、ついに一歩も歩かなかった。いや半身を起こすことすらなくその生を終えた。

母の死後、枕元の文箱を開けると、兄の写真や手紙とともに公報が四つに折りたたんではいっていた。そのざらざらとした厚手のわら紙を、何回母は読み返したことだろう。いくら読んでも人は帰ってくるものではなかった。走り書きのメモ帳もあった。「山西省翼城県曲沢附近（候馬駅）」と書かれて三月十九日以後プッツリと切れ、後は空白のメモ帳。

生きている間、母は夜半になると寝たまま線香をたいた。兄が戦死した時刻なのである。

散りしてふ夜半の香煙しげくして思ひ出満つる母の胸かな

北支派遣清水部隊有富部隊恵藤隊の人たちは、母の詠んだこの歌を白樺の墓標に書き現地に建ててくださったそうである。

昭和四十五年になって亡き兄の戦友から、戦場の白樺の幹から剝いだ皮が送られて来た。

「昭和十六年三月

第十五軍撃滅作戦ニ大谷小隊長ヲ失ヒシ山西大行山脈中、一陣地大圪塔山、麓ニ繁ル白樺ノ林ヨリ」

一見和紙のような白樺の皮に書かれたこの墨文字は、薄れて読みづらくなっていたが、二十九年という長い歳月ていねいに保存しておいてくれた戦友の真心を、兄よ、母よ、受けてたもれと祈りたい。

兄の戦死後、戦友からいろいろの手紙が来た。兄は、負傷して死にぎわに「おばさん」という言葉を残したことを私たちは知った。父もなく母が病弱だったので「妹たちを、おばさんよろしく」と言いたかったのだろうか。

兄は多くの人から好かれた。親戚のおばさんはもちろん、あちこちに他人のおばさんもいた。みんな「忍ちゃん、忍ちゃん」と声をかけてくれた。最後のことば「おばさん」はどのおばさんでもよかった。この話をきいたおばさんたちは、たちまちぽろぽろ涙を流した。みんな自分のことを呼んだに違いないと思ったのであろう。多くのおばさんが、兄にとっては母であったのであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.